

1歳4カ月に軽快した 先天性気管支狭窄にもとづく無気肺の極低出生体重児例

中村 公紀^{1,2)} 井手 康二¹⁾ 森井真理子^{1,2)} 瀬戸上貴資^{1,2)} 堤 信^{1,2)}
橋口 千鶴^{1,2)} 井上 真改^{1,2)} 木下竜太郎^{1,2)}
太田 栄治^{1,2)} 森 聡子^{1,3)} 廣瀬 伸一^{1,2)}

¹⁾ 福岡大学医学部 小児科

²⁾ 福岡大学病院総合周産期母子医療センター 新生児部門

³⁾ 福岡山王病院 小児科

要旨：【はじめに】気管支狭窄症にともなう無気肺は比較的まれな疾患であるが、無気肺や、繰り返す肺炎の原因として注意を要する疾患である。【症例】症例は在胎27週4日、出生体重1152gで出生した。気管挿管し新生児呼吸窮迫症候群に対し人工サーファクタントの気管内注入をおこなった。人工サーファクタント注入後の胸部X線で右S2領域に無気肺が認められた。同無気肺が消失しないため気管支鏡をおこなったところ右気管支に狭窄が見られた。呼吸状態は安定していたため、日齢30に計画抜管した。抜管後も無気肺は残存していたが呼吸状態は安定しており、家族に在宅での理学療法について説明・指導を行い日齢118に退院し外来フォローとなった。生後1歳4カ月時の胸部CTで無気肺の消失を確認し、以後6カ月が経過しているが再発を認めていない。【考察】児の成長と家族による根気強い理学療法によって軽快したと推測される症例であった。家族への適切な説明と治療協力によって軽快した症例として報告する。

キーワード：先天性気管支狭窄症，無気肺，理学療法，新生児，極低出生体重児